

昭和63年度における東京地区の川崎病の既往歴のある中学校1年生と高等学校1年生について (分担研究：川崎病についての研究)

保崎純郎、泉田直己、清原鋼二

要約：昭和63年度の東京都の中学校1年生と全日制高等学校1年生の川崎病の既往歴のある生徒数と、入学前の断層心エコー検査あるいは血管造影検査の有無につき調査した。その結果、川崎病の既往率は中学校1年生で0.27%、全日制高等学校1年生で0.25%であり、小学校1年生の0.87%に比較して低率であった。次に、入学前に断層心エコー検査などが終了していたのは小学校1年生で98.2%、中学校1年生で94.1%、全日制高等学校1年生で55.6%と高等学校1年生で低率であった。

見出し語：川崎病、既往歴、断層心エコー検査

研究目的と方法：

目的：昭和63年度の東京都の3区の中学校1年生と17の都立高等学校1年生の川崎病の既往歴のある生徒数と、断層心エコー検査あるいは血管造影検査の有無につき調査した。そして、前回報告した昭和63年度の小学校1年生の成績と比較し、今後の学校心臓検診における川崎病の調査方法につき検討した。

方法：中学校1年生は昭和63年度に東京都の3区に在籍していた6,385名を対象に調査した。高等学校1年生は新たに開始された心臓検診を受けた全日制都立高等学校約78,000名の内、川崎病再調査表あるいは我々が問診で確認できた都立高校

の17校に在籍していた高等学校1年生7,253名を対象に調査した。

結果：

公立中学校1年生6,385名(昭和50年4月から昭和51年3月までに出生したもの)の内、川崎病の既往歴のあるものは17名(0.27%)であった。17名中心血管後遺症のあるものは1名認めた。次に発症年度別にみると昭和50年 1名、昭和51年 0名、昭和52年 5名、昭和53年 4名、昭和54年 2名、昭和55年 0名、昭和56年 5名であった。すなわち、中学校1年生では4歳未満で川崎病に罹患したものが多かった他、川崎病が多発した昭和56年に罹患したのもも認めた。次に断層

東京医科歯科大学小児科

(Dept. of Pediatr, Tokyo Medical and Dental Univ.)

心エコー検査の有無についての調査では、断層心エコー図検査が中学入学までに検査が終了していたのは17名中15名であった。

全日制都立高等学校1年生7,253名(昭和47年4月から昭和48年3月までに出生した生徒)の内、川崎病の既往歴のあるものは18名(0.25%)であった。18名中心血管後遺症のあるものは1名で、すでにバイパス手術を受けていた。次に発症年度別にみると昭和48年7名、昭和49年4名、昭和50年1名、昭和51年0名、昭和52年2名、昭和53年1名、昭和54年0名、昭和55年0名、昭和56年0名、昭和57年2名であった。すなわち、4歳未満に罹患したものが多かったが中学校1年生と同様に年長児で川崎病に罹患したのもも認めた。次に断層心エコー検査の有無についての調査では、18名中9名が高等学校入学までに検査が終了していた。未検査であった9名のいずれもが昭和48～49年に川崎病に罹患したものであった。

昨年度報告した昭和63年度小学校1年生(昭和56年4月から昭和57年3月までに出生したものの)川崎病の既往歴についての成績では、対象人員6,404名、川崎病の既往歴のあるものは56名(0.87%)であった。その内、心血管後遺症を認めたのは3名であった。発症年度別にみると昭和56年4名、昭和57年33名、昭和58年9名、昭和59年2名、昭和60年3名、昭和61年3名、昭和62年1名、昭和63年1名であった。小学校入学前に断層心エコー検査などが終了していたのは56名中55名で、未検査であったのは1名のみであった。

考 察：

昭和63年度の川崎病の既往率の比較では、小学校1年生で0.87%であったのに対して、中学校1年生0.27%、高等学校1年生0.25%と共に低かった。ただし、川崎病が多発した昭和56年から昭和57年に、すでに年長児になっていた中学校1年生と高等学校1年生で川崎病に罹患したものを認めた。

次に入学前に断層心エコー検査あるいは血管造影検査が終了して、心臓後遺症について評価されていたのは、小学校1年生で56名中55名(98.2%)、中学校1年生で17名中16名(94.1%)であった。一方、全日制都立高等学校1年生では18名中10名(55.6%)のみが終了しているのに過ぎなかった。全日制都立高等学校1年生で低率であった理由として2つのことが挙げられる。まず、第1の理由として全日制都立高等学校1年生の場合、発症した時期が昭和48年と昭和49年に多かったので、その時期に断層心エコー検査が医療機関でまだ不可能であったためと推測された。第2の理由として、現在の東京地区の小・中学生を対象にした学校心臓検診では、川崎病の既往歴のある者の内、断層心エコー検査が未検査であった者は、医療機関で必ず断層心エコー検査を受けるように指導している。しかし、昭和57年以前にはそのような指導ができなかったためと考えられる。ちなみに、断層心エコー検査装置が各医療機関に普及してきた昭和60～62年度の同じ東京地区の調査では、断層心エコー検査あるいは血管造影検査が入学前に終了していたのは昭和60年度の小学校1年生で42名中38名(90.5%)、昭和61年度の小学校1年生で47名中45名(95.7%)、昭和62年度の小学校1年生

で64名中64名（100％）であった。したがって、東京地区の小・中学生の心臓検診で川崎病既往者についての指導が引き続き行なわれているので、全日制都立高等学校1年生を対象にした心臓検診で、川崎病既往者についての調査に時間をかける必要は数年後にはなくなると思われる。

文献

1) 保崎純郎他：東京地区の川崎病既往歴のある児童・生徒数の調査、小児科臨床：41：1491、1988.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:昭和 63 年度の東京都の中学校 1 年生と全日制高等学校 1 年生の川崎病の既往歴のある生徒数と、入学前の断層心エコー検査あるいは血管造影検査の有無につき調査した。その結果、川崎病の既往率は中学校 1 年生で 0.27%、全日制高等学校 1 年生で 0.25%であり、小学校 1 年生の 0.87%に比較して低率であった。次に、入学前に断層心エコー検査などが終了していたのは小学校 1 年生で 98.2%、中学校 1 年生で 94.1%、全日制高等学校 1 年生で 55.6%と高等学校 1 年生で低率であった。